



ハンドボールが生まれ変わろうとしている。長らく国際舞台から遠ざかり、国内リーグへの関心も薄れる中、19年女子世界選手権の熊本開催、20年東京五輪開催を見据えてレベルアップと変革を推し進めていくのだ。これから5回に渡り、ハンドボール再生の力基を握る人物の連続インタビュー特集を掲載する――。

――まずハンドボールを始めたいキッカケは？

宮崎「大分・明野北小3年の時、ハンドボールをやっていた姉について練習や試合を見に行き、オレもシュートを打ったら入りそうだな！ と思って始めました」

元木「小学2年の時に兄の影響で始めました。地元（茨城）の新治クラブです。藤代紫水高―日本体育大に進み、年代別の日本代表に選ばれるようになり、それから『世界と戦いたい』と思うながら頑張っています」

宮崎「大分国際情報高から日体大に進み、世界の強豪を肌

で感じ、プロの世界を知り、より深くかわるようになりました」

――これまで一番、つらかったことは何ですか？

宮崎「高校時代の練習がキツかった。同期20人が1年を待たずに10人に。休みも年に1日だけ」

元木「ボクの場合は……3日ありました（笑い）」

宮崎「休みたいたいのオフになると何をやっていいのか、分からなかった」

元木「同期生9人が、やめないうで続けようと誓い合って踏ん張りました」

――アジアの中の日本のハンドボールの立ち位置を教えてください。

宮崎「2年ぶりに代表に復帰しましたが、やはり力タールなど中東、あと東アジアでは



©六川則夫

「五輪のアジア出場枠は1しかない これは想像以上の厳しさがあります」

▽宮崎大輔（みやぎき・だいすけ）▽写真右 81年6月6日生まれ。大崎電氣所所属。テレビ「スポーツマンNo.1決定戦」でハンドボールの知名度をアップさせた。身長174㎝、体重75㎏、右利き。
▽元木博紀（もとぎ・ひろき）▽写真左 92年2月14日生まれ。大崎電氣所所属。スピード、キレ味、しなやかな三拍子揃ったゴールゲッター。身長182㎝、体重78㎏、左利き。

韓国が力か抜きんでいていま求められます。

宮崎「あつ、代表最年長ですが、東京五輪を諦めているわけではありませんからね（笑）上の厳しさがあります。プレー中は、ベテランります。ボク自とか世代交代なんてことは一切考えず、ひたすらに勝利とアジア予選敗退という結果を求めて全力でプレーを経験しました」

元木「宮崎さんは《ここで1点が1点》という場面が確実に決まってくる。本当に頼もしい存在です。憧れの人と日本代表でプレーするようになって《想像していた通りの人》だと思いました。プレーも人柄もサイコーです！」

宮崎「どうもありがどう（笑）。コイツの走り込みからのシュート、横からのシュート、トリッキーなシュート……とにかく凄いのひと言に尽きる。ハンドボールの魅力は、攻守の切り替えの早さと点がたくさん入ること。ぜひ皆さんに見に来て欲しい。ボクも日本代表のプライドを強く持ちながら頑張ります」

元木「宮崎さんのジャンプシュートの高さ、プレススピードの速さは見逃せません。日本代表も新陳代謝を図りながら、ボクも全力でファイトします！」